

## 外部・他者・働く「私」

— 絲山秋子の初期小説を中心に —

徐 小 雅

### 一、はじめに

日本の労働の現状に触れる現代文学において、作家本人の物語として、または作家個人の経歴や職歴と照合されて読まれるものは少なくない。その背景には、日本の現代社会における雇用及び格差、貧困の諸問題が存在する。労働、または「働くこと」自体は、階級や人種、性差と絡み合う複雑な問題であるが、現在の問題を喝破し、是正や改革を最終的な目的とする評論やノンフィクションにおいては、現状と課題の共有が最優先されることで、個々人が直面する問題はカテゴリア化され、共感されやすい普遍的なものとして紹介される傾向も見られる。<sup>(1)</sup>

上記の傾向を念頭に置き、日本の現代文学における労働、また「働くこと」に関わる物語を読む際に、留意すべきなのは、ネオリベリズム的な「自己責任」論が批判されている現在、普遍的・構造的課題として論じられてきた現代日本の労働及び格差、貧困という主題を扱う「個人」の物語において、公的・普遍的・構造的課題と対峙し、自分と関係し合う部分を私的・特殊的・個人的問題として抱える〈私〉は如何に位置づけられるであろう。しかし前述のように、現代文学において労働または「働くこと」と関わる問題を種々の差異と絡み合いながら「個人」の物

語に集約されるものとして考えるとすれば、そこからさらに掘り下げるべきなのは、絡み合いながら「個人」の物語に集約される差異の様相を読み解くこと、及び「個人」の物語と、現代社会という外部との関係性であろう。

本稿では、以上の問題意識を踏まえ、前述した二つの方向性の後者、つまり「個人」の物語と外部の関係性について考えたい。本稿の構成としては、まず日本の現代文学における〈私〉のあり方に対する論考を取り上げ、〈私〉と外部社会の関係性を分析し、〈私〉は如何にその関係性の中で定置され表現されるかを考える。続いて具体的な作品分析では、女性作家の絲山秋子が二〇〇〇年代の中頃、すなわち現代の労働及び格差、貧困の問題が盛んに議論されはじめた時期に発表した「沖で待つ」と「ニート」という二つの小説を取り上げる。この二作はともに一人称の女性の語り手の視点で書かれた小説で、「個人」の目線から見る外部社会や（不）労働、及び性差、格差の論題と深く関わる作品でもある。この二作の読解を通して、働く〈私〉の物語と外部社会との関係性に対する一つの見解を提起したい。

### 二、浮遊する「私」

高橋源一郎は『大人にはわからない日本文学史』（岩波書店、二〇〇九年二月）の最後で、日本の現代文学における「私」の変化を論じた。

高橋は、コンピュータに最初からインストールされ、後に更新され続ける基本ソフトという比喻を使い、「個」としての「私」を近代文学のOS（オペレーティングシステム）<sup>(4)</sup>と言ひ換えた。「個」の内に向ける眼差しにより「私」の「内面」が告白されるというのは、日本の近代文学、及び私小説に対する一般的な認識でもある。村上春樹や島田雅彦などの八〇年代の作家は、このような「作者と主人公の「私」が同一人物であると設定されている小説のあり方を強く否定し」ても、「私」である作者の影が拭いきれず表出されている。だが一九九〇年代中盤以降に創作活動を始めた中原昌也や阿部和重、平野啓一郎らの世代の小説では、「近代文学的な「私」」が疑われ、また「私」自体の「匂い」が「希薄」なものとなっている。<sup>(5)</sup>

高橋は、現代の日本文学において「私」に本格的な変化をもたらしたのは、ゼロ年代から執筆活動をはじめた世代の作家であると考えている。例えば岡田利規や綿矢りさの小説は、これまでの近代文学では自明視されてきた、「私」や「内面」を引き出す「根源的な問い」を放棄するか、あるいはそれを自ら禁じている。高橋による近代文学の「OS」という比喻は、あくまで慣用の「システム」の意味で使用されており、したがってそれを「制度」に言い換えると、まず「OS」という表現の軽さや「使いやすさ」は削ぎ落とされる。「私」や「内面」を掘り下げる近代文学の「システム」は、実際の創作活動と重なり合っている。コンピュータの用語を借りれば、つまり作者が異なる「OS」の下で、ア

プリケーションやソフトを使用するように、同じ主題を扱い、一見したところ類似的な結果を得たとしても、それは異なる演算と処理の過程が導いたものということである。

伊藤氏貴は、前述の「新しいOS」への切換えに対し、高橋の論において、旧型の「OS」は「不在」という形でしか語りえなかったことを指摘している。だが伊藤の言う「不在」は、「私」や「内面」の不在だけを意味するのではなく、「あえて存在させなかった」ものとして、「私」や「内面」が忌避や拒否の対象になったことを示している。<sup>(6)</sup>なぜなら、「不在」だけが、近代文学以前のシステムに逆戻りすることもなく「新しいOS」へ切換わる保証として働いたとは考えがたいのだ。したがって高橋は「私」や「内面」の「不在」をゼロ年代の文学を評価する軸として語ったが、「厳密に見れば評価の軸は「不在」ではなく「拒否」や「距離」である。「私」や「内面」との距離でしか新しい文学の評価を測れないとするなら、いわゆる「新しいOS」は未だ開発されていない、というのが文学の現況と論じ、保留する態度を示した。<sup>(7)</sup>ここで留意すべきなのは、高橋の論に対する伊藤の指摘の通り、新しい世代の作家の小説において「私」は、拒否される対象や距離を置かれる対象になりつつあるが、近代小説の中心とも言える「私」自体は実際には空洞化されていないし、そもそも「内面」を見出す目が存在していない点である。

視点の転移は、技法と表現の面で日本の現代小説における「私」を考える手がかりの一つになるかもしれない。佐々木敦は、渡部直己の移人称小説への評論を踏まえ、柴崎友香や山下澄人、岡田利規などの小説中の「わたし」が、それ以前の小説とは違い、「イスがぼくを載せている」という例文のように、アフオーダンス的な考えに近いものであるこ

とを指摘している。<sup>6)</sup>「わたし」は外部との関係性で「わたし」の位置を把握する、と言い換えてもよからうか、この外部は当時の環境、つまり「わたし」が置かれている場所や社会的立場としても考えられる。

具体的に小説で検証してみると、例えば岡田利規の「わたしの場所の複数」<sup>7)</sup>（『新潮』二〇〇六年一〇月号）は、女性の語り手による一人称小説だが、時々語り手の「わたし」が読んでいる他人のブログの内容も「わたし」の思考Ⅱ記述に挿入され、そのまま「わたし」の語りに混ざり込む。さらに、「わたし」の視点からではあり得ない記述も紛れ込み、時々「わたし」の視点が「幽体離脱的に身体から離れる」ものにも見えると指摘されている。<sup>8)</sup>

携帯が、布団の上で考え事をしながら横向きになってずっと体を折り曲げた姿勢で寝ているわたしの、ちょうど腹部と太腿部とに包まれているように見える位置でころがっていたので、そのときのわたしの姿は、一つの卵を温めているみたいだった。（「わたしの場所の複数」八十五頁）

天井を見ていると、板の張り合わせられ方やその板の作務的な目ふうの柄や、柱と接しているところからなにかしみになっていて同心円状に痕が残っていることや、そういうものすべてが、実はそうした柄や形をした床や地面の、たとえば風景や空間の設計案の模型みたいなものであって、しかも今はそれを見上げているのではなくて、俯瞰して覗き込んでいるところなのだというような錯覚の中に、わたしは、なぜかごく容易に陥ってしまって、それからわりと時間を措かずにその感覚は、すぐにそのときのわたしの全感覚にまで、ふわっと敷衍

されて行く。（「わたしの場所の複数」一〇四頁）

上記の引用のように、複数の視点や視点のズレは「わたし」の語りの特徴でもあるが、具体的にこの視点の移動はなにを意味するのかについて考えたい。

嶋田直哉は岡田の実践的な演劇身体論を踏まえ、演劇における身体と言葉の関係性を以下のように敷衍した。すなわち身体（Ⅱしぐさ）は言葉（Ⅱテキスト）から生成されるのではなく、身体と言葉は一つの（イメージ）から汲み出され、「それぞれ異なるふたつのシニフィアン」になる。言葉と身体は対等的な関係であり、役者の仕事はこの関係性に基づき「豊かなシニフィエ」Ⅱ（イメージ）——引用者注——を捏造することだが、パフォームすること（イメージ）が肥大化し、言葉と身体がズレが生じる、ということだ。<sup>9)</sup>

演劇論を小説に当てはめることは危険をとまなう読み方でもあるが、岡田が言及した（イメージ）の生成のプロセスは、現代小説における「視点——人称」の操作の読み取りにもある程度参考にできる。視点人物である「わたし」自身の言葉が重さを失い、「わたし」は「わたし」の言葉とともに、確立されることもなく、物語空間の中で浮遊している。「わたしの場所の複数」において、「わたし」の夫という他者が確実に存在し、「わたし」と言葉を交わし、時々「わたし」が夫に暴力を振うことがあるのにも関わらず、上記の引用のように、物語の中で「わたし」を捉えようとする際には、必ず「わたし」の近くにある携帯との相対関係や、天井と同じ高度の「何か」の俯瞰的視点が伴う。言い換えれば、「わたし」の外部の何らかの、「わたし」の言葉に統轄されていないものと

の不安定な関係のなかで、「わたし」の輪郭がぼんやりと描かれている。「わたし」と、「わたし」と関係し合うけれど「わたし」を規定しえない他者、及び「わたし」ととつての外部——隠喩としての物質的な「外部」だが——は、物語の中では並列的・「対等的」な存在として考えられる。

このような浮遊する「私」が現代小説に登場ことのできる理由を追求する場合、現代社会における外部と、「他者」と「個人」の関係性から手がかりを得られるかもしれない。「個」の生成や「個人化」の過程において、差異と他者の発見は不可欠である。しかし、グローバル化の中の「新しい近代」の「リスク社会」で展開される個人化には、大きな変化が見られる。それは、個人が「新しくおさまるべき場所」は、準備されておらず、たとえあったとしても、居場所としてはまったく不十分で、個人がおさまるままに消えてしまうような、たよりない場所ではない<sup>12</sup>。現状に直面しているということである。

ジークムント・バウマンはこの「不十分」、不安定な「われわれの生きる近代」をリキッド・モダン、すなわち液化化されている流動的な近代と称し、かつての堅固で重厚な段階の近代は、「体制」から「社会」へ、「政治」から「生活政治」へ、および社会生活の「マクロ」段階から「ミクロ」段階へと降りようとしている」と説明した<sup>13</sup>。かつて「自己——他者——社会」の間の信頼（性）に結び付けて創出され、「社会的」として考えられていた「公共的」なものが、「ミクロ」に分割され、個人が立脚する基盤自体が不安定になりつつあるのが、「われわれの生きる近代」＝「外部」とも言えるであろう。

ベックとバウマンによるグローバル化の中の現代社会論から考えら

れるのは、現代小説における「私」を論じる際に、格差や、階級・人種・性差により相対化される慣習的または構造的な他者とは別の存在で、徐々に前景化され「私」と並列的になってくる「環境」的要素を示す「外部」はどのような存在なのか、または如何に「私」と関係し合うのか、という問題であろう。「わたしの場所の複数」において、「外部」は「わたし」の位置を指し示す座標として作用するが、それは結局、極めて限定的かつ示唆的に、細かいと言えるほどの物の配置により作られている「場所」であつたのだ。前述のように、この小説において他者は存在しているが、「わたし」を形作るのは他者との関係性ではない。しかし、本論が最初の問題提起で言及したように、個人の「働くこと」に関わる問題は、種々の差異と絡み合うゆえ、「働くこと」を中心に据える個人の物語を読む場合、むしろこのような不安定な「私」と、「環境」的要素を示す外部と、差異を提起する他者との関係性に注目することも必要であろう。

上記の問題意識を踏まえ、続いては絲山秋子の初期作品である「沖で待つ」と「ニート」という二つの短編小説を取り上げ、労働及び格差・性差と深く関わる「働く（私）」の物語と、外部との関係性是如何に現代小説の中で描かれることについて分析する。

### 三、外部に抑えられる他者——「沖で待つ」

絲山秋子は「沖で待つ」（『文学界』二〇〇五年九月号<sup>14</sup>）において、女性の語り手の視点から、現代の職場における男女の新しい関係性を描いた。この小説の主人公で語り手の「私」は、山梨出身の女性総合職と

して設定されている。「私」と「太ちゃん」こと牧原太は東京の大学を出た同期で、後にも福岡の営業所に配属され、そこで仕事の仕方を学ぶ新人時代を過ごした。

「私」が「太ちゃん」と仲良くなる背景には、言語の問題と職場における女性の間の差異が窺える。「私」の同期に女性総合職は何人もいたが、福岡に配属されたのは「私」一人だけで、加えてこの営業所には、先輩の女性総合職もない。「私」は孤立しているとは言えないが、女性社員の「社会」に上手く溶けこむこともできない。

私はだれとでもそれなりに仲良くやっていたのですが、会社で苦手な場所が二ヶ所あって、それは更衣室と給湯室でした。事務職の女性たちはみんな感じよく接してくれたのですが、でもやはり私はよそ者でした。

「所長がそげんこといいよんしゃったとお？」ともしあがつているところに私が入っていくと、みんな笑顔で疲れさまですと言ってくれるのですが、その後の言葉は、「もう福岡に慣れましたか？」という完璧な標準語なでした。井口さんみたいなベテランの人でも、会社を辞めるまでは決して丁寧語を崩してくれませんでした。山梨で育った私が付け焼き刃でみんなと同じ博多弁が喋れるはずありません。自分の机がある島では、結構口の悪いことを言っているはずの自分が、更衣室と給湯室ではいつも旅行者みたいな気分になるのでした。（「沖で待つ」六八―六九頁）

上記の引用箇所のように、私に自分が「よそ者」だと思わせるのは、

単なる女性総合職と事務職の差異だけではなく、事務職の女性による方言と標準語・丁寧語の使い分けであり、現地採用され地元で働いている一般職と、各地への転勤を仕事の前提とする外来の総合職の、社内での位置づけの相違も浮上している。事務職の女性たちが、「会社を辞めるまでは決して」崩さない丁寧語と「完璧な標準語」で対応することを仕事の一部として考え、丁寧語と標準語を仕事の道具として使用することから、「私」との関係が仕事上の付き合いであることは明らかである。

しかし、仕事と配属先での生活に慣れると、出身地と学生時代の地元から離れた「私」は、学生時代の共感を失い、「だんだん学生時代の友達とは話が合わなくなってきた」たことを感じるようになった。「私」は自分の「世界が狭い」とは自覚しているが、「心置きなく話せるのは、やっぱり会社の人」と思うようにもなった。同期の「太ちゃん」は後に社内の事務職員の女性と結婚し、仕事の仕方も全く違うが、「私」は彼と「一度も喧嘩をしたこと」もなく、「たわいもない話ばかり」をずる淡白で心地よい関係を築いた。

「沖で待つ」が百三十四回の芥川賞候補作品として挙げられ、選考を受けた際に主に注目されていた点は、山田詠美が選評で述べたように、この小説で描かれている「友人でもなく、恋人でもなく、同僚（*colleague*）」という女性と男性の新しい関係性だった。だが芥川賞の評者は、主に「女性総合職の居る職場」をこの新しい関係性の基盤として読んでいるようだ。例えば河野多恵子は、この小説における仕事現場の描写に対して、「彼等の職業の織り込まれ方の見事さには感心し」、この小説は「現代の本式の職業」を「自由に書きこなした」と評価した。黒井千次も、「女性総合職の出現によって女と男の対等に働く場が生まれた。それが新しい

現実である」と述べた。<sup>(16)</sup> 確かにこの職場は、最終的に「根性さえあれば、女だろうがよそ者だろうが、ちゃんと認めてくれ」（八一頁）る、性別や出身地を問わず平等に働ける場所として「私」に認識されている。しかし女性総合職の出現自体は、一九八〇年代中頃の男女雇用機会均等法の成立と実施以降にすでに起きていたことであり、日本の企業で働く女性性が直面する現実から、約二十年の時間が経過していること自体の問題も存在する一方、「対等に働く女と男」という図式では、「私」と「太っちゃん」の、さらに「私」と「私」に「感じ良く接してくれた」事務職の女性たちとの関係性について読み取りきれない部分も存在し、寧ろ二〇〇五年に発表されたこの小説が示した「現実」の新鮮さそのものを否定している。

山田詠美は「私」と「太っちゃん」の「同僚」関係について、さらにこの小説は「その関係に横たわる茫漠とした空気を正確に描くことに成功している」と指摘した。<sup>(17)</sup> この「茫漠とした空気」という言葉は、「沖で待つ」に描かれている近くて遠い人間関係を巧妙に捉えている。

「あのさ、一番やばいのはHDDだと思うのさ」と、言ったのです。

「HDD？」

「ハードディスク。パソコンの」

「ああ、それやばい。私もやだ」

「だろ。もし死んだらどうするよ」

「そっか、死んだら人に見られちゃうんだ」

お互い何が真相なのかは言わなくて、それはジジ抜きみたいな会話で

した。

「協約結ぼうぜ」

太っちゃんは胸を張って言いました。

「先に死んだ方のパソコンのHDDを、後に残ったやつが破壊するのさ」（「沖で待つ」八七―八八頁）

後に埼玉に転勤した「私」は、東京に単身赴任してきた「太っちゃん」と久しぶりに飲み屋で会うのだが、話題は「どこの飲み屋でもやってるような、典型的な三十代」の仕事話から、家族や恋人にも言えない「秘密」のことに転じた。上記の引用のように、「太っちゃん」は突然死後の話を持ち出し、「私」も軽い気持ちで話に乗ったが、結局件の「秘密」について具体的な内容は何も明らかにされないまま、二人は相手の死後、お互いのハードディスクを処分する約束を交わした。この会話において、死後でも暴露させたくないほどの「秘密」の重さは感じられない。「私」は死そのものから、自分が仕事を行う建築現場の竣工を連想し、「納まらない現場がないように、死なない人はいない」（九四頁）と考えている。「私」と「太っちゃん」にとっての死もいつも、現場の「漏水で死んで違算がどっさり」という「くだらないギャグ」のようなものだが、仕事の内容と問題処理の辛さでそれを一種のブラックジョークに転化する感覚は、ともに働いている人たちの間でしか共有できないものでもある。秘密の内容に触れない距離感と、死後のことを頼める信頼感は、二人の間の微妙な関係性を描き出しているが、会話の中に漂う死の軽さは、最終的に飛び降り自殺の巻き添えで突然の死を遂げた「太っちゃん」の最期の不条理さと直結すると考えられる。



「太っちゃん」の死後、「私」は「太っちゃん」との約束を果たすため、彼が生前に送ってきた鍵を使い、五反田にある彼の単身赴任先の家に潜入し、パソコンに残したデータを誰にも読ませないようにハードディスクを破壊した。その後まもなく、埼玉に戻った「私」はまた転勤の辞令を受け、今の場所から離れるのだ。

いつも思っていたのです。

このメンバーで飲むことは最後かもしれない。

半年たてば誰かが転勤し、また誰かがやって来る。イレギュラーな転勤だってある。どこが最後かなんてわからない。一つの場所に一年しかないかもしれないし、十年いるかもしれない。

でも、それが生きた組織だと思っていたのです。（「沖で待つ」一六頁）

「生きた組織」の内部で働く限り、いつかどこかに異動し、新しい人間関係を結ぶことも、組織で生きる人間ならある程度思いつくことだが、具体的な予想はないと同然である。「私」という存在も、「星型ドライバー」一本だけで、ハードディスクから全ての「記録が消える」レベルのものでしかない。「私」と「太っちゃん」の関係は、こうした不安定な「生きた組織」の中で築かれたものである。「私」がほかの同僚の秘密を、「私」の前に突如として現れた「太っちゃん」の幽霊にも暴露しないように、恒常的に変わる職場という外部を前提とする「同期」や「同僚」のような人間関係は並列的であり、信頼し合っても影響を与えらるほど深い交渉や関与の段階までは踏み入らない。

小説の最後、「太っちゃん」の幽霊は、「私」と会話をし、「私」が自分の死後に消したい秘密、つまり隣人を盗撮・盗聴したデータの存在を察知するが、実体のない「太っちゃん」の幽霊の視線は、私のものと微妙に重なっている。「私」の部屋に居座る「太っちゃん」の幽霊が「私」の妄想なのか、それとも実際に存在するものなのかは明らかにされていない。だがどちらにせよ、この小説の最初で「私」が何故か自分の部屋にいる幽霊の「太っちゃん」との応酬を、彼との「机を並べて残業していたときの会話の一部を切り取ってきたよう」な頃と重ね合い、それで「なんとも言えない気持ち」になったことから、生者である「私」にとって、幽霊の「太っちゃん」の現実味は薄いとも考えられる。

大澤真幸は、「沖で待つ」を「ほんわかとした雰囲気ノスタルジックな小説」として評し、「幽霊」というのは、「状況の外にある他者の視点の寓話的な表現のようなもの」であり、視点がこの外的な他者に転移したことで、ノスタルジーが可能になり、また相手を相対化したゆえ、その秘密を見ることができると、この小説における「同期」の位置づけを説明した<sup>(18)</sup>。だが大澤の論は、「恋愛の視線とノスタルジーの視線の両立の可能性」で、「私」と「太っちゃん」の関係性を考えているが、「太っちゃん」と「幽霊（の「太っちゃん」）の「私」の「秘密」に対する態度と認識のズレを説明しきれない。寧ろ「死んでも同期は同期なのですから」という「私」の考えのように、「幽霊」の現実味の薄さは逆説的に、「同期」である「太っちゃん」がこの小説において、「私」を相対化する他者として機能していなかったことを示唆している、とも考えられる。

この意味で、「沖で待つ」は、職場という外部の不安定さを前面に出

し、他者性が抑えられているからこそ築ける良き人間関係を描いた小説とも言えるかもしれないが、そこには男女の性差、あるいは女性同士の間の差異が後景化されていることも読み取れる。

#### 四、規定する／規定される「私」——「ニート」

前述のように、「沖で待つ」を「職場」という外部を前面に出す小説として読むとすれば、絲山秋子が「沖で待つ」の前に発表した「ニート」(『i feel』二〇〇五年夏号)<sup>19)</sup>は、「働くこと」の核心的な部分を主題として扱うゆえ、外部により抑えることのできない他者を描いた小説かもしれない。この小説の背景には、「ニート」の概念が日本社会に浸透しはじめたことがある。二〇〇四年頃、若者の失業問題を示す言葉として「NEET」という概念が日本に紹介され、流行語として広がった。<sup>20)</sup>しかし日本語の「ニート」が指す若者の年齢層は原語より幅広いものとされ、加えて前の流行語である「パラサイト」や「ひきこもり」のイメージに引きずられたものになり、またはメディアにより「凶悪化」した、とされる青少年への連想が生じたことも指摘されている。<sup>21)</sup>

絲山自身は小説「ニート」の題名について、流行語としての「ニート」の「蔑称」と「自嘲」という二つの側面を取り上げ、「ニート」という言葉について「どこかプライドがないことがプライドのようなもの」に感じられ、また「蔑称にせよ名前がついたことでどこかホッとする」と述べ、積極的な意味で捉えている。<sup>22)</sup>実際この小説において、「ニート」という概念も、しばしば「ひきこもり」や「オタク」など主にネガティブな意味で使用される言葉と並列または混同されている。

この小説は、女性の語り手の「私」が、「ニート」の男性の「キミ」に向かってものを書く、という形式をとっているが、語り手である「私」について留意すべき特徴が二つある。まず「私」は頻繁に「キミ」のブログを覗きに行き、「キミ」の「全てが切迫している」生活を恰も自分の目で見た、自分の体験や心情のように書き残している。

キミは来る日も部屋に閉じこもって、借金の取り立てと光熱費の取り立てに脅えながら暮らしていた。食事は一週間に三食。一食は具の入っていないインスタントラーメンで、あとの二食は調味料だけで作るチャーハンだった。食事のない日は水道の水を飲んでいる。ほうじ茶はまだ少しある。タバコはとくに切らしてしまい、シケモクさえもなくなった。私がキミのサイトに行った日、キミの全財産を切っていた。キミはとにかく電気が切れてしまうことを恐れていた。(「ニート」八頁)

上記の引用のように、「キミ」のブログの読み手である「私」の視点には、「キミ」に極めて近接している。家に残るものを淡々と計算する文章は、「私」がこの空間の中に配置され、生活をしているような錯覚も与える。

「私」の語りのもう一つの特徴は、「私」と「キミ」が全編にわたり固有名のない人物として描かれていることである。固有名の不在は、語り手である「私」が「キミ」に名前、あるいは名前に相当するものを付与する可能性を示している。例えば「ニート」の冒頭部の最後で、「私」は「キミ」のことを以下のように断言する。



キミはあらゆる権利の外にいて、健康だが働いていないし働く気もない。つまりキミはニートだ。キミは自分が社会から援助を受けることができないのをよく知っているし、他人からの援助を受けるには申し訳ないと思っている。とても失礼なことを言うけれど、キミにはニートの方が向いている。似合わないスーツを着るよりも。(「ニート」九頁)

上記の引用部は、この小説の本文において最初に〈ニート〉という言葉が使用される場面でもある。「私」はこの一言で固有名のない「キミ」を〈ニート〉として規定したが、前述の「私」の語りの特徴を考えてみれば、「私」が「キミ」を規定する行為自体に対し、もう少し検討する必要がある。

星野智幸は、この小説は〈ニート〉という「マイナスのレッテル」を用いて自分たちの表現にしていこうと試みて、「漠然としたイメージだけがもてあそばされるニートに、はつきりした輪郭と手応えを与えてくれた」ことが、「一般的に流通するニートという言葉への抵抗」であることを指摘した。<sup>(23)</sup> 星野の指摘は、この小説がは表題も含め、〈ニート〉という負的レッテルを明確な自己表現の手段として使用すること、または濫用される流行語としての〈ニート〉へ抵抗することを評価したが、この小説は基本、社会や「世間」という外部が存在してもそこへは踏み出さずに、「私」と「キミ」との極めて限定的かつ閉鎖的な関係性の中で描かれたものである。寧ろこの引きこもるような関係性の中だからこそ、〈ニート〉という概念から「はつきりした輪郭と手応え」が見つ

やくくなるかもしれない。「私」が「キミ」を〈ニート〉と呼ぶことは逆説的に、〈ニート〉というレッテルに、「キミ」のほかの「属性」、例えば〈オタク〉や〈ひきこもり〉というレッテルを恣意的に付け加える行為でしかないゆえ、〈ニート〉という言葉の流行と拡散に伴う意味付加の恣意性と無責任さへの批判としても読める。

また、「私」は書くことを生業とする作家であり、「本なんか読まない男」である「キミ」の生活を覗き見て、「キミ」には「知らせない」が「キミ」に向かってこれを書いている」(二〇頁)こと自体が一方的かつ暴力的な行為だが、「私」は「キミ」との「対等」的な関係を強調する。

作家になる前に、会社員として働いていた「キミ」と出会った頃の「私」は、「書きたいから書いている」無職者だった。「その頃そんな言葉はなかった」が、今の「私」から見れば「私もニートだった」。作家という職業のリスクを熟知している「私」は、今の仕事は「何の保証もな」く、「書けなくなったら終わ」るものなので、「私」と「キミ」の間には、僅かな差だけが存在する。

せめて夢でもあれば世間は目に見てくれたかもしれない。少なくとも、私は物書きになりたいという夢だけで、世間にはずいぶん許してもらっていた。世間だけじゃない。自分で自分のことを大目に見ることだってできた。けれど夢なんて言おうものならキミはせせら笑うに違いない。(「ニート」一〇―一一頁)

ここで注目したいのは、「つまりキミはニートだ」と断言した「私」

の、「世間」という外部と同化していた目線が、「世間にはずいぶん許してもらっていた」位置まで降りてきたことである。「夢」と働くことをめぐって、「世間」と対峙する「私」は、ここで「キミ」と「対等」になり、「キミ」に向かつて話をしている。

キミは今、ギリギリ二十代だ。キミは殆ど、生きることをやめてしまった。あのサイトだけを残して社会から姿を消した。私はキミの社会復帰なんか別に願わない。私はキミに対してどんな責任も持っていないのだから、口を出す権利はない。お互い様だ。イヤな言葉を使えば「対等」ってやつだ。

だけど私はその「対等」を崩そうとしている。（「ニート」一一頁）

「対等」という言葉を使うのも「イヤ」になるほど、一定の距離を保ちながら「キミ」への共感を示した「私」だが、「キミ」に金銭を貸与することを決めた時点で、「私」と「キミ」の間に経済的格差が浮かび上がった。「私」は、「キミ」を（ニート）として定義する「世間」という外部と同化していた者や、「キミ」と同調する（ニート）だった者から、経済力の差で「キミ」を相対化する他者となったのだ。「ニート」の物語の最後、興味深いことに、差異の可視化がここで連鎖的に発生している。「例えば今、私がキミと寝たらキミは私のヒモみたいになってしまう。だから私はキミとは当分寝ないだろう。キミにはプライドがあるし、私にだって節度というものはある」（二二頁）という「私」の語りのように、「キミ」に金を貸した後の性は、金銭との交換になり、格差と性的搾取が連想されるようになったのだ。また、「キミ」に金を貸

すため、「私」も街金のドアの前に立っていた」から、「街金」と「私」の間に上下関係が生じ、「私」が相対的な経済弱者になったことも描かれている。労働や格差、性差という外部における構造的問題と関わっている以上、「ニート」という小説は、他者なき物語として描かれること自体は不可能であるとも言えるだろう。

## 五、結びに

本稿は、日本現代小説における（私）の意味変化を踏まえ、絲山秋子の「沖で待つ」及び「ニート」の二作を中心に、働く（私）が描かれる物語のなかで、職場や「世間」という外部と、（私）を意味づける他者の相互関係を分析した。グローバル化の中での現代社会を背景として、一部の現代小説のなかで描かれる（私）は、社会などの外部との関係の中でしか（私）の位置を確認できないゆえ、（私）自体も極めて不安定な存在として考えられる。

本稿の後半は、この不安定な存在である（私）を踏まえて、常に何らかの力の不均衡が伴う労働、または「働くこと」の物語において、（私）と深く関わる「外部」と「他者」の関係性は如何に変化するのかを考察した。「沖で待つ」で描かれている「同期・同僚」という新しい関係性には、構成員が常に入れ替わる不安定な職場という外部に焦点を当てるゆえ、「同期・同僚」の他者としての働きが最小限まで抑えられている、という背景がある。言い換えれば、「私」と「同期・同僚」はともに「職場」や「仕事」に規定される並行的な存在として登場し、常に変動する「生きた組織」の中で人間関係を結ぶ。「私」と「太っちゃん」の信頼

関係の反面で、この小説において、仕事や「働くこと」はある程度均質的かつ普遍的な概念として使用され、性差と、女性総合職と事務職の間に存在する格差などの職場における様々な差異が、地域の風習や「よそ者」への拒否として後景化されることを仄めかす部分も読み取られる。<sup>(1)</sup>

一方、「ニート」における「キミ」の物語では、語り手である「私」は、「ニート」の「キミ」に向かって語る際に、時々自分自身の視点を「世間」という外部や、「世間」に規定されている「ニート＝キミ」のものと同化するゆえ、明確な他者すら登場していなかった。だが金銭の貸借により「私」と「キミ」の間の力の均衡が一気に崩れた際に、性差や経済的格差は可視化され、「私」は「キミ」と相対化される他者になったのだ。

現代小説における〈私〉の物語において、〈私〉が他者との関係性ではなく、不安定な外部との関係性の中で規定され続けているとすれば、「働く〈私〉」の物語において、その外部は様々な形、例えば「社会」や「世間」、職場などとして現れる。だが上記の絲山秋子の二作への分析から考えられるのは、労働、または「働くこと」自体は常に様々な不均衡を伴うものであり、したがって「働くこと」をめぐる個人の物語は、常に階級や人種、性差など様々な差異と絡み合っている。現代の「働く〈私〉」の物語において、〈私〉は常にこのような外部と他者の関係の中で揺らぎ続けているのだ。

## 注

(1) 例えば二〇〇〇年代以降、日本社会における貧困と格差の現状を露呈さ

せながら分析を行った、三浦展『下流社会 新たな階層集団の出現』（光文社、二〇〇五年九月）や湯浅誠『反貧困 「すべり台社会」からの脱出』（岩波新書、二〇〇八年四月）などのノンフィクションは、統計データとインタビューを併用し、実証的な報告として現状を反映するものであるが、調査対象をカテゴリー化する傾向も見られる。カテゴリー内の均質化により問題の共有と普遍化を目指す際、誰との共有であるかということ、また働く個人の位置づけが曖昧になることも、留意すべき箇所であらう。

(2) 高橋源一郎『大人にはわからない日本文学史』岩波現代文庫、二〇一三年六月、一五五―一五六頁（初出二〇〇九年二月）。

(3) 岡田利規論は「五日目」「日本文学戦争」戦後秘話」二二―二二六頁を参照。綿矢りさ論は、「六日目」小説のOSを更新する日」一五七―一六〇頁を参照（『大人にはわからない日本文学史』所収）。

(4) 伊藤氏貴「『私』との距離―ゼロ年代の文学状況―」『文芸研究』一一三号、明治大学文芸研究会、二〇一一年二月、三六頁。

(5) 同（注4）、三九頁。

(6) 佐々木敦・渡部直己「脱構築と複雑系―今日のフィクションを読む―」『新潮』二〇一五年一月号、三一―四頁。

(7) 「わたしの場所の複数」の本文引用及び頁数は、『わたしたちに許された特別な時間の終わり』（新潮文庫、二〇一〇年一月）に準拠する。引用箇所の傍線は全て引用者による。

(8) 古谷利裕「誰かについて考えている誰か、のことを誰かが考えている―岡田利規論」『新潮』二〇〇八年九月号、二四二―二四三、二四六頁。

(9) 岡田利規「演劇／演技の、ズレている／ズレてない、について」『ユリ

イカ』二〇〇五年七月号、七四―七六頁。

- (10) 嶋田直哉「「ゼロ」度の言葉／身体（エクリチュール）―岡田利規『三月の5日間』を読む―」、『日本文学』七〇一号、二〇一一年十一月、六八頁。

- (11) 「第二の近代」（U・ベック）及び「再帰的近代」（A・ギデンスに近い意味で使用する）。

- (12) ジークムント・パウマン『リキッド・モダンティ』森田典正訳、大月書店、二〇〇一年六月（初出二〇〇〇年）、四四頁。

- (13) 同（注12）、一一頁。

- (14) 「沖で待つ」の本文引用及び頁数は、『沖で待つ』（文春文庫、二〇〇九年二月）に準拠する。引用箇所の傍線は全て引用者による。

- (15) 「芥川賞選評」『文藝春秋』二〇〇六年三月号、三七〇頁。

- (16) 同（注15）、三六九―三七三頁。

- (17) 同（注15）、三七〇頁。

- (18) 井坂洋子・清水良典・大澤真幸「創作合評」第三四六回、『群像』二〇〇五年一〇月号、三八〇―三八二頁。

- (19) 「ニート」の本文引用及び頁数は、『ニート』（角川文庫、二〇〇八年六月）に準拠する。引用箇所の傍線は全て引用者による。

- (20) 「ニート」の概念を紹介し、インタビュなどの日本国内の調査を加える玄田有史と曲沼美恵の共著『ニート フリーターでもなく失業者でもなく』（幻冬舎、二〇〇四年七月）が広く読まれたことも、言葉が浸透した一因であると思われる。

- (21) 内藤朝雄「お前もニートだ」『図書新聞』二〇〇五年三月一九日。

- (22) 絲山秋子、星野智幸対談「ニートが作家になるとき ただなるのでなく

続けていくために必要なもの」『ユリイカ』二〇〇六年二月号、五二―五三頁。絲山の発言。

- (23) 同（注22）、五一頁。星野の発言。

- (24) 但し小説のなかで、「私」が自分のことを「本を出せる」「物書き」とは言うが、一度も「作家」と自称したことがない点は、留意すべきであろう。

- (25) なお、絲山が三十六歳の女性無職者の「私」の視点から、女性の「働くこと」をめぐる様々な差異を描く作品に、『勤労感謝の日』（『文学界』二〇〇四年五月号、後に単行本『沖で待つ』（文藝春秋、二〇〇六年二月）に所収）がある。だがこの小説において、バブル入社世代の女性総合職であった「私」がかつて直面した「学歴逆差別」と採用枠の少なさを回想する際に、「もちろん今の学生はもっとキツイ。仕事がない。我々の世代には苦勞を語る資格は与えられていない」と苦言した。現在の「働けない」という生きづらさの普遍化及びそれに対する認識により、その巨大な問題の一角とされている、女性が働く際に直面する／した問題を語ることに対する後ろめたさと、語りきれない不満は、「沖で待つ」における「仕事」という概念の裏に微かに匂わせる均質化・普遍化の問題と共通する部分も読み取れるのではないか。

（じょ しょうが、名古屋大学大学院博士課程後期）